



# 転生しちゃったよ (いや、ごめん) 4

ALPHAPOLIS

ヘッドホン侍  
*Headphonesamurai*

アルファライト文庫 

▼ジョーン=ヴェリトル

ウィリアムスの教育役。  
美形でDS。研究バカ。

◀シフォン

犬の獣人で、元『影』の少女。  
ウィリアムスの専属メイドと  
なるべく修業中。

▲キサム▲

エイズーム王国の  
国王。ウィリアムスの  
父キアンとは悪友。

▲キアン=ベリル

ウィリアムスの父。  
エイズーム王国の  
騎士団長を  
務める。親バカ。

▲ジルコ=ニンジア

エイズーム王国黒騎士団  
情報部隊長。隠密行動が  
得意で無表情。

▲サン▲

ウィリアムスの親友で、  
学園寮のルームメイト。天然。

▲セフィス

エルフの少女。  
ウィリアムスの同級生。  
少しおバカなところがある。

▲ウィリアムス=ベリル

前世の記憶を持ったまま、  
名門貴族ベリル家に転生した  
本作の主人公。

▲シロ▲

ウィリアムスが契約した  
白い龍の召喚獣。  
人型にもなれる。

## 1

日本の高校生だった俺が、異世界の貴族ウイリアムスⅡベリルとして転生して早八年。

三年前には『影』という裏組織に誘拐されそうになったところを返り討ちにしたり、この間は学園祭で襲撃してきた魔獣を倒したりと、なぜか面倒……いや、とつても充実した生活を送ってきたわけなのだけれども。

そんな俺の活躍が国王の耳に入ったせいで、王命により極秘で隣国のヒツツエ皇国に潜入し、調査することになってしまったのである。どうやら俺の八年の人生を充実させてくれやがった誘拐事件とフェルセス学園襲撃事件に『影』が関わっていたらしいと分かったからな。一連の事件の状況証拠を考えると、第一に浮かび上がったのがヒツツエ皇国だったのだから、とりあえず向かうことになったのだ。

俺の役目は『影』のアジトの情報収集だけだったんだけど、仲間に出されてブチ切れた俺は、結局『影』のアジトに乗り込み、ぶっ潰してしまった。そうして『影』の長スビネルを捕まえて、エイズーム王国に戻って来たのが今朝のこと。

当然、ヒツツエに行っていた間は学園の授業には出てないわけ。

学園の白風の寮に戻つてすぐ、小柄なユリや先輩から、召喚魔法の授業を担当しているヴァリーノ先生がご立腹だという絶望的な情報をいただいでしまったのである。

だつてさ、ヒツツエ潜入は国王の密命だったんだから、誰にも本当のこと言えるわけないじゃん。一応、出かけるとだけは部屋に書き置きしておいたんだけど、まあ普通はサボりだと思ふよね……。

最悪な気分陥つたまま朝食のひとつきは終わり、始業の時間が迫つてきた。

今さら抵抗しても意味がないことは分かっているが、俺の身体は理性に反して教室に向かうことを拒否しているようだった。

なんとなく顔色が悪いらしい。同級生のサンにからかわれた。

……くつ、年下のくせに年上をからかうんでねえ！ 俺の中身は通算二十五歳であるぞ！

まあ、いい。俺は大人で紳士だからな、細かいことは許してやる。

「……ふっ」

アンニユイな笑みを浮かべる俺だが、実のところサンとセフィスに廊下を引きずられていた。

セフィスも俺の同級生で、エルフの可愛らしい女の子だ。

というか、やけに二人が必死なのはなぜだろうか。そんなにも二人は俺のことを心配してはくれないのか。生贄にでも捧げたいのか。お兄さん泣いちゃうぞ。

……仕方ない。認めてやろう。

俺は今、恐怖している。二眼目に待っている授業に——いや、より正確に言うならばヴァリーノ先生に年甲斐もなくビクビクと怯えているのだ。

かつこ悪いと罵ればいいさ。否定はしない。

身体の地味な抵抗もむなしく、教室が迫ってきてしまった。

無断で授業を欠席したのは悪いと思つてさ。それは怒られても仕方ない。

でも、そうじゃなくてもヴァリーノ先生は普段から俺を邪険にして、凍つく視線を向けてくるのだ。

……大体さ、おかしいと思ふんだ。

俺がヴァリーノ先生になんかしたか？ 否！

なら、なぜ俺がこうも彼に目の敵にされているのか。それは、ひとえに父さんのせいである。ヴァリーノ先生は俺が父さん——キアの息子というだけで、冷たく当たっているようなのである。

他の生徒には優しいヴァリーノ先生にあんなに嫌われるだなんて、父さんは一体どれだ

けのことをしたのだろうか。

うむ。これは一度問い詰めねばならんな。

理由も分ならず、あの極寒ごくかんの地に立たされるのは納得がいかない。

というわけでやってきました、教室。

……ん？

やけに学友みんなの視線がこちらに向いているような気がするんだけど……気のせいだよ？

「……ウイル、今日はサボらないよね？」

思わず振り向けば、ジト目のサンにそう言われてしまった。

……む。

言い返せないのが、ツライデース。



さあさあ、みなさん、お待ちかねのー……って待ってねえ！ 少なくとも俺は待ってねえけど！

優しくてスマートでかっこいいヴァリーノ先生の楽しい楽しい授業アリザートの時間ですよ！

……うん、やめとこう。ひとり心の中、全力で媚こぼを売ってもむなしいだだけだ。媚こぼも売り

されていないように思えるのも気のせいなのだ。

俺のそんな内心を見透みすかしたかのようなタイムニングで、教室の扉が開かれる。

そしてスラリとした御御足おみあしが見えて——

「……ウイリアムス……ベリル！」

「……ふあいつ!?」

思わずマヌケな声をあげながら起立してしまった。

だって仕方ないじゃないのよ。なぜか一瞬にして空気が刺すように冷たくなって、絶対零度れいどの水の世界に閉じ込められたようだったんだもの。

あのまま呑気に椅子に腰を落着けていたら、そのまま凍りつくところだったのだ。

「……ちっ」

ええええー！ 今ヴァリーノ先生が舌打ちした気がするのだけだよ！

気のせいだよ！ 気のせいだよ、そうに決まっている。

「なぜ、私の授業をサボったのか。私はこの授業の重要性を口をすっぱくして言い聞かせたつもりであったのだけれどね——」

残念ながら舌打ちは気のせいじゃなかった。淡々と説教を始めてくださっている。

「——そもそも私の召喚獣の授業に出席しないというのは、真面目まじめ不真面目だ、規則がどうだ、という問題ではもはやないのだよ、分かるかね？ 一に君の安全。召喚獣は契約し

ているといえども魔獣なのだ。危険がないわけがないだろう。二に周囲への影響。召喚獣が君の指示に従わず困るのは、なにも君だけではない。分かるか？ 周囲の者が被害を受けるのだ。君にはすでに教室を破壊したという前科があるではないか！ それに……」



はい。こつてりしほられました。

ヴァリーノ先生がしぶしぶ授業を始めたところでチャイムが鳴っちゃうくらいにね。

それでいいのか。教職者として。

そんなこんなで、今俺たちは長い一日をやつとの思いで終え、白風の寮へ向かう廊下を歩いていた。

「もうっ、ウイル！ これからは絶対サボらないでよね！ ……大体なによ、きまぐれで外行つてきましたって」

そう言つて口を尖らせるのはセフィスさん。

学園に帰った直後、セフィスは俺を心配してくれたから、てっきりサボりだとは思われていないと考えてしまったが、彼女の中ではしつかりサボりになっていたようだ。

仕方ないじゃない。さつきの授業時間中、国王からの密命であつたがゆえに弁明できな

かった俺は、氷点下のヴァリーノ先生に向かつて、「きまぐれで、ふらつとしてきちゃいました！ てへべろ！」と咄嗟に言つてしまったわけである。

当然、それは火に油を注ぐような真似であつて——いや、この場合、水に塩をぶちまけるような真似といふべきか——その結果、説教タイムを延長させることとなった。

それでも俺はやつてない！

いや、サボつただけださ！ ことは犯しちゃつてるけどさ！ やりたくてやつたわけじゃないし……嘘ですね、俺から首を突っ込んだんだつた。

「はああ……悪かつた……俺が悪かつたんだ……」

思わず肩を落としてうなだれてしまう。

「分かればいいのよ。わたしたちもウイルがいなかった日はコワイ思いをしたんだからね。今度サボるなんてことがあつたら、クラス一丸となつて妨害することになるわよ！」

「ごめんなさい、ほんと。今後一切やりません」

うん。自分からは絶対に面倒事に首を突っ込まない。

そう決意したときだつた。

「……ル……んだ……」

後ろから小さな眩きが聞こえたような気がして振り返る。

「ん？ サン、何か言つたか？」

サンは俯うつむいて歩いていたが、俺の言葉に顔を上げると首を振って笑った。

「え？ 何も言っていないよ」

「んー……そうか、気のせいかな？」

俺は首をひねると、再び前を向いて歩き出した。

確かに聞こえた気がするんだけどな。

……はっ！ もしかして……さっきのは幽霊!?

それかあれだろうか。目が合うと死んでしまふとかいう、例の巨大蛇だろうか？ 配管の中を這はいずり回つちやったりしてるんだらうか。……うん、このネタはやめとこう。怖いし、色々。

ていうか、この世界なら伝説のバジリスク並みの蛇とか普通にいそうだもん。俺の召喚獣のシロとか近いものがあるしな。白龍だし。

そのうえ、魔獣ゴーストとか、幽霊っぽいのがそこらの森やら墓やらにいるわけだから。俺は小さく身震いすると、なかつたことにしてごまかすようにスキップしながら進み出した。

「と、ところで俺が休んでいた間の授業は、どんな感じのことをやってたんだ？」

「それって、ヴァリーノ先生の？」

慌あわてて話題を変えた俺に、セフェイスがそう返してきた。

「うん。流石さすがに次回まで説教じゃたまらないからな、一応聞いておこうと思って」

「……まあウィルならどの授業も出なくていいようなものだもんね」

そう口を尖とがらせ羨うらやましそうにするセフェイスには、苦笑を返しておく。

「前回の授業は、召喚獣を呼び出して、イシのソツ？ をはかるとか言ってたわ」

「意思そつうの疎通そつうな。ふーん、そうか。じゃあ会話したり触ふれ合ったり、で合ってる？」

若干言語が怪あやしいセフェイスに突つ込みつつも考える。

「そうそう、それよ。わたしもリリスちゃんとは結構仲良くなれたし、楽しかったのに」

気づけばセフェイスは、ジト目になっておられる。

……今ヴァリーノ先生の話題は鬼門きまへだな。

心の中で溜ため息を吐はきながら、俺は再び話題の転換を試こころみる。

「……そういえば俺、セフェイスの召喚獣知らないや。……リリスちゃん(?)は、何ていう種族しゅぞくだ？」

「アスーカっていう鳥なの」

「アスーカか……」

説明しよう。アスーカとは、小鳥のような大きさから恐竜ドテラも真まつ青あおなサイズまで大きさを変えられ、騎乗きじゆうするもよし、偵察ていさつに使うもよしと冒険者にも騎士にんぎ士にも人気の高い、鳥型の魔獣まじゆうである！

頭から尻尾に向けて群青からうぐいす色にグラデーションになっていて、森の上を飛ばせば完璧な迷彩色なのだ！

また風属性の魔法を得意としており、現代技術も仰天な録音や、自らの遮音もできる。いやしかし君！

大事なものはそこじゃないのだから。

アスーカは風を愛してやまないらしく、普段はマグロの如く止まることなく空を滑空している。そう、それゆえ別名『飛び鳥』。

……飛び鳥じゃねえか！！

と、初めてこの魔獣の存在を知ったときに思わず叫んだ俺をどうして責められようか。そのことを思い出しつつも、折角つながった別の話題に、俺は必死で乗ることにした。

「……アスーカの色は群青とうぐいすだろ。セフィスの髪も綺麗な黄緑だしな。似合ってるよ」

無理やりニコリと微笑んだのだが、セフィスにはすぐさま顔を背けられてしまった。む、そんなに見苦しい表情をしてしまっただろうか。

それっきり、なぜか無言になってしまったセフィスに俺はどうしていいか分からず。

そのうえ、こういうときに頼りになるサンも無言のままだし。

結局、俺らは寮までの半分以上の道程を終始無言で歩くことになったのであった。

## 2

セフィスとは寮の階段で別れ、俺とサンは自分たちの部屋に向かった。

しかし部屋に着いた今も、サンは無言を貫いている。

……気まずい。

「あの……サン？」

部屋に入るなり、無言で椅子を引いて机に突っ伏してしまったサンに恐る恐る話しかける。もしかして俺、自分でも気づかぬうちにサンを怒らせるようなことを言ってしまったのだろうか。

不安になってくる。

自慢じゃないが、俺なら十二分にあり得るから怖い。ここ何年かのうちに何度メイドのシフォンに鈍感と言われたことだろう。俺は人の気持ちに敏感なほうではないらしいのだ。怒らせた理由はまったく分からないが……。

「……」



サンはまだ口を一文字に結むすんでいる。  
 チラリとサンを見やりながら、吐き出しそうになる溜め息を我慢して部屋の中に入った。こうやって口を閉ざしているんだ。机にうつ伏ぶせになっているからサンの顔は見えないが、きつと憤怒ふんぬの表情を浮かべているに違いない。

「……サン、俺、何かしちゃったかな」

とうとう沈黙に耐えられなくなった俺は、再び口を開いた。

するとサンはビクリと肩を揺らして、顔を上げる。

「……ごめん、ぼーっとして……聞いてなかった」

そう言ったサンの顔には、本当に今やつと気がついたというような驚愕きまじろが浮かんでいた。「いや、いいんだ」

俺が怒らせたんじゃないならな。理由も分からずに不愉快にさせて友人を失ったんじゃない。やりきれない。

なんだかんだ言っただけ、実はサンはこの世界で初めての同年代の友人なのだ。……悲しくも八歳になつての初めてなのだが、まあそこは今は関係ない。

とりあえず怒っていないなら一安心か。

——だからといって、見逃せるものではないけどな。

眉間に皺しわを寄せて溜め息を吐いているサンを盗み見ながら、ひとまず部屋を出ていくことにした。

とにした。

「ちよつと用事があるから、外行ってくるな」

「あ、うん。……行つてらっしゃい」

「あ、ウィル。どうしたの？」

釈然しやくぜんとしない気分のまま階段を上ると、普段から談話室と化しているロビーにはセフィアがいた。その後ろには聖母——メリアさまがいる。

メリアは常におつとりと優しい雰囲気ふんいきを醸かみ出しているから、俺は心の中で『聖母』と呼んでいる。

「ん、ちよつとな」

セフィアにそう返しながらも、俺は遠慮がちにメリアさまに挨拶あいさつをしておく。

前世の頃から女子が二人以上いる場合は苦手にがなのだ。集団というのは恐ろしい。普段は見せないような思いが、集団になつて初めて出てくることもある。げに恐ろしきは集団心理かな。

ま、俺の場合、女子との会話でドギマギしてしまいますがね。……ふつ。

と言つても、流石に十歳やそこの諸君にドキドキしてしまうような変態ではない。だから、必要以上に緊張きんじやうして無言になることもないぞ。

ダンディズムである。決して言葉に出せないわけではない。俺は無言になってしまうのではなく、ただ単に、元からかっこいい寡黙な男であるだけなのだ。

自慢じゃないが、俺の女性経験は皆無である。もはやそれは女性恐怖症と呼べる域に達するんじゃないかってほどで、一部の女子の間では男色の疑いありと囁かれるくらいに……むなし。うん。それは前世の話だ。ほら、俺、今八歳だし。

それでも遠慮がちな口調になってしまいうのは、ひとえにこの魂に深く刻まれた前世の習性というものなのだろう——悲しい。

「そ、外に出ようと思つて」

俺は首を振つて思考を無理やり中断すると、セフィスたちにそう告げて足早にその場を去った。



「で、どうされたのですか？ 何か御用があるのでしょうか？」

俺は校門を潜ると、そう呟いた。

周囲に人影は一切見られない。

いやいや、別に友人に素気なくされて、見えない『エア友人』に独りで話しかけてる悲

しい奴じゃないからね。

「む、やはりウィル殿には敵わぬな」

そう言つて門の陰から現れたのは、ジルコニンジアさん。俺と一緒にヒツツエ皇国に潜入した、エイズーム王国の情報部隊長だ。

今日も庶民ルックな彼だが、漏れ出る魅力を隠しきれていない。クソ、イケメン滅べ。俺にはマリヨクは腐るほどあるが、男のミリヨクというものが圧倒的に不足している。

母音しか違わないというのに、持っているものがこうも違うとは……へこむ。言葉は時に暴力になり得るといふ。母音だけでこの威力とは、なるほど納得だ。

肩を凍めるジルコさんは、相変わらずの無表情ながら、どこことなく焦燥した雰囲気だった。いつもは風の魔法を使いつつ魔力を隠蔽するという高等技術をやってのけているので、さすが国一番の忍者だ——いや、情報部隊長だけ——と思うのだが、今日寮に忍び込んで来た彼からは魔力が漏れ出てるわ、気配は伝わってくるわで、ただことではなかった。それがむしろ俺にあえて存在を示しているように思えて、寮を抜けてきたのである。

……サンとも少し気まずかったし。逃げるようでもよくないとは分かっているんだけどな。

「それで、お話はどこで？」

俺は質問しながら、ジルコさんに視線を向ける。

「我が屋敷に来ていただけるであろうか。お茶でも出し申す」

なるほど、話は長くなる、と。

「……はあ……」

俺は小さく溜め息を吐いた。

これはあれだろうか。寮の門限とかオーバーしちゃうパターンだろうか。寮の管理人さんに『門があるのは学園の前であつて寮には扉しかないんですよ、寮に門限なんてないんですから入れてくださいよ』とか言わねばならないのだろうか。

……制度あつたらいいのにな。国家機密に関わるような理由で校則を破った場合には特別で許される、みたいなの。国と学校の板ばさみになつた生徒、困っちゃうじゃん。

……そんな生徒いないか、俺以外に。

まあ、今回の件は俺が自ら首を突っ込んだのだ。だったら最後までつきあわないとな。それが責任っていうもんだ。

この件に関しては、学園のいかなる処罰も甘んじて受け入れるとしよう。



ジルコさんの屋敷、つまりはニンジャ屋敷と聞いて心躍らない者がいるだろうか。

期待に胸を高鳴らせ、ドキドキしながら王都の道を歩いた俺を待ち構えていたのは、し

かし無情な現実であつた。

「……何て言うか……普通ですな」

思わず肩を落とし、そう漏らした俺にジルコさんは苦笑した。

ニンジャ屋敷は、夕方のエイズームの街にあまりにも自然に溶け込んでいたのだ。

「ウィル殿は何を期待しておられたのだ？ 風変わりな屋敷では本末転倒ではないか、わざわざ王都に建てておると申すのに」

「木を隠すなら……つてやつですよ。いえ、分かつてはいたんですけどね。でも、もうちょっと、こう……」

俺は尻つぼみに言葉を終わらせておいた。

いや、期待してたといつても、実際にはそんなことないだろうとも予想していたわけで、納得はしているのだ。

でもさ、忍者屋敷だよ、忍者屋敷。

そりゃ、何かあると妄想しちゃうじゃない？ 影の館とか結構すこかつたしさ。

「では、大した御持て成しも出来ぬが」

扉を開いたジルコさんが促すのに従い、俺は頷いて歩き出す。

「お邪魔いたします」

せめて、覗きたいな横開きの戸にして欲しかったよ。

ジルコさんの前を通り過ぎながら、そんなことを思っていた。あれだな、これはきつと内部にいろいろ仕掛けがされているに違いない。隠し扉とか、落とし穴とか、回転扉とか、天井が落ちてきたりとかさ。……つて、それじゃ死ぬわ。ふつと苦笑しながら、俺は屋敷に足を踏み入れた。

「さて、何処からお伝え申せばよいか……」

ジルコさんにしては珍しく、若干眉間に皺を寄せて唸った。

いつも無表情でいるのは、きつとアンチエイジングのために違いない。よく笑う人は目じりに皺ができるというし、そうすると法令線だって笑顔で刻まれそうだ。つまり無表情の裏で彼は『皺』なんてできたらジルコ、困っちゃうー』と考えているのである。たぶん。イケメンもイケメンで、それを維持するのは大変なのだ。

粗茶であるが、と出された紅茶に強烈な違和感を覚えつつ、俺はそれをちびちびと飲む。「……まず、『影』の屋敷から回収した魔道具であるが、ほとんどは魔法陣らしきものが見当たらず、中に魔石が入っているのみであった。しかし一つだけ見たことのない魔法陣の刻まれているものがあり、調査は難航しそうとのことである。もつとも、この件に関わっている研究職がジョーンしかおらぬゆえ、それも仕方がなからうが」それはある程度予想していた。

あの夜、俺は急いで影の館に戻り、大量の魔道具を回収してペンダント型魔道具に収納しておいたのだが、その存在をエイズームに帰るまですっかり忘れていたのである、俺つてば。

本当に焦って周りが見えていなかったのだと、今さら実感する。あるいは、『影』の事件を解決したことで気が緩んでいたのか。いずれにせよ、今考えたところで意味がないのは分かっているんで、後悔も反省もとりあえず後に回しておく。

魔道具の存在を思い出したのは、王城に着いてからだった。

馬鹿だ。ほんと馬鹿。

俺はひとまず陛下やジルコさんにその場で受け渡した。その後、やはり魔道具はジョーン先生のところに行ったようだ。

ジョーン先生は俺の家庭教師だった人で、今は王宮で魔法の研究をしている。しかも、『影』の一件を知る数少ない人物の一人だ。だから、魔道具が彼の手に渡ったのは当然だし、俺もそれを見越していた。ジョーン先生の研究室に魔道具が預けられれば、俺も調査に協力しやすいと思ったんだ。

『影』の館で俺が手に取ったランプ型の魔道具らしきものには魔法陣が見当たらなかったが、もつと詳しく調べれば何か分かるかもしれない。それに、他にも調べてない魔道具があったし。

この世界の魔法具に刻まれる魔法陣は日本語なので、もしジョーン先生の知らない魔法陣であっても、俺には効果が分かる。

ちなみに、陛下やジルコさんには俺が魔法陣を読めることも詠唱の意味が分かることも、まだ明かす気はない。いや、今後明かさないだろう。たとえ二人と友人のような関係になったとしても、友人である前に身分がついてくるのだ。魔法陣や詠唱の意味が分かると思ったら、陛下もジルコさんも、国のために思えば動くほかあるまい。新たな魔法や魔法具の開発、軍事利用を俺に命令するしかなく、俺も協力しないわけにはいかないだろう。国が豊かになるのはいいことだが、大きすぎる力は歪みを生じさせる恐れもある。だから、簡単に言いふらすことなどできないのだ。

魔法具については、あとでジョーン先生と一緒に調べればいいだろう。万一、それでも分からなければ、スピネルから聞き出せばいい。

しかし、そう楽観的に考えていられたのは、次のジルコさんの言葉を聞くまでであった。「そして、これには不肖も嘆ききれないことなのであるが——」

自然と息を呑む。

「——スピネルが死した」

### 3

「……で、何をやっているのですか」

溜め息とともに、なぜかいきなり目の前に現れて唸っているウィル君を見る。

ウィル君は案の定ビクリと跳ねると、ぎこちなく私に視線を向けた。

最近は何つたたびにこの反応だ。楽しくて、私は毎回、ついウィル君で遊んでしまっ。

しかし、今日はどうも様子がおかしい。

いつものようにビクビクとこちらの様子を窺うのではなく、肩を落として神秘的な面持ちで俯いている。

まあ確かに、流石におふざけでここまで突然転移してくるようなことはあるまい。ここは何より王宮の深部——国家機密すら転がっている、王宮勤めの学者の研究室なのだから。

「……じょーんせんせー……僕、やってしまいました」

見れば、顔を上げたウィル君の目が少し潤んでいる。ウィル君に言わせると『目から涎が出ています』という状態らしい。あとで追及したところで頑なに認めないだろうが、彼は泣いているようだ。

つい忘れてしまっただけで、まだ彼は八歳。学園でつらいことでもあったのだろうか。普段は同年代の友人のように思っただけで接しているが、八歳は八歳なのだ。

……しかも、こう目を潤ませて見つめられると、天使のような容姿も手伝ってこちらが悪いことをしているような気分になってくる。なんとかして慰めなくては。

し、しかし守をしたこともなければ、子供のあやし方も私は知らない。

そういえば、こういうときはジョークだ、とどこかの小説に描かれていたよな。

「ついに殺してしまいましたか。どこのどなたを殺したのですか？」

思いついたままに言ったが、これではジョークにすらなっていない。よくてブラックジョークだ。

しまった、と後悔しながらウィル君を見ると、小さく苦笑している。

「いや、ちょっとジョーン先生、僕の印象どうなっちゃってますか。……似合わないジョークまで……すみません。ありがとうございます。気を遣わせてしまいましたよね」

まあ、何とかなったよつだ。

似合わないなどと非常に不本意なことは言われたが、キノコでも生えそうなほどじめじめとした暗い雰囲気は吹き飛ばされただけでも、結果は上々と言えるだろう。

ウィル君がお礼とともにペコリとお辞儀をして再びその顔を上げたときには、悲愴感などがすっかりなくなり、真剣な表情になっていた。

「……僕に影の館の魔道具を見せてください」

そう言ったウィル君と視線ががち合った。

流れる沈黙。

私は思わずにやけそうになる表情筋を引き締めていた。

このウィル君の表情を私は知っていた。

——そう、これはキアン様の顔。キアン様が騎士団長として大事な仕事をしようというときに見える鋭い表情そのものだった。

それを八歳で一丁前にしているというのだから、未熟らしい。

本当に。この人の教育係になれた運と、志願した自分の判断力を全力で賞賛したい。

神に感謝を捧げるのは何度目だろうか。少なくとも、ベリル家を初めて訪ねた五年ほど前から一気に増えたことは間違いない。



「……僕に影の館の魔道具を見せてください」

息を吸い込んでそう言った俺に、ジョーン先生は合点がいったような表情になった。

俺はジルコさんにスピネルの死を聞いた直後、ジョーン先生の研究室に魔法で転移して

きた。

いきなり来てごめんなさい。でも、今は時間が惜しかったのだ。そしてすぐに対応してくださる貴方は、さすが俺の家庭教師。伊達に何年も付き合っていない。

俺なら、突然人が現れたら絶対うろたえるって。

「……確かにウイル君なら分かるかもしれないね」

平然としているジョーン先生は立ち上がって柵の前行き、何食わぬ顔で鍵に魔力を注いだ。ガチャリと音を立てて開いた柵の扉に手をつくると、奥の方に腕を突っ込んでまさぐっている。

「はい、どうぞ。本来は他者に渡してはいけないのですが」

そう言いながらもジョーン先生は、皿を前にして餌い主を見上げる犬のような目をしている。『ウイル君、早く解明してください』と言わんばかりだ。

少しジト目になりつつも、まあそれもそうか、と内心納得する。

エイズームの王宮のような高名な学者の集う研究所でも、開発される新たな詠唱、魔法陣は一世代に一つあるかないかなのだ。

だから影の館で見つけた新しい魔法陣には、とてつもない価値がある。

ジョーン先生から渡された魔法道具は鳥籠のような形をしており、ちょうど止まり木に当たる所に魔力が設置されていた。

鳥籠の扉を開けて中の魔力を取り出し、そこに刻まれた魔法陣を見る。

「……え？」

魔力疑似増加……？

半ば呆然と声を漏らしてしまった俺に、ジョーン先生は真剣な表情で聞いてくる。

「ウイル君、魔法陣の意味は分かりましたか？」

興味が幾分か見え隠れしているが、普段のこの手のことに関するジョーン先生の様子と比べれば、随分落ち着いている。

「はい。魔力量を擬似的に増加させる魔法陣が刻まれていました」

「なるほど……影の長が明らかに自身より高い魔力量を持つ高位魔獣を従えていたのは——」

「この魔法道具で魔力を周囲から集め、無理やり自分の中に押し込めていたから、ですね」

沈黙。

思わず、お互い無言で見つめ合ってしまった。

擬似的に魔力量を増強するなんて、さっき俺が言った方法くらいしかない。

「そんなことが……」

ジョーン先生が呆然と呻いた。

「スピネルの死因は、これでしょね……。そんな無茶をすれば、肉体に負担がかかるの

「……はあ」  
小さく溜め息を漏らしてしまった。  
現金な奴だな、俺は。  
何がスピネルをそこまで突き動かしたかは、本人亡き今となってはもう永遠に分からないが、その執念には薄ら寒いものを感じるというのに。  
人が結局は死んでいるというのに、だ。  
俺は安堵している。それがいいことか悪いことかは、正直分らない。  
でも、『悪役が倒されて、みんな笑顔でめでたしめでたし』なんて、そんな世の中簡単じゃないことはもう知っている。

「は当然です」  
あまりの事実に衝撃を受けるとともに、しかしホッとする自分がいた。  
スピネルが死んだ原因は俺にあると考え、恐怖しながらここに飛んで来たのだが、それが違ったのだ。  
スピネルは、自分よりも魔力のあるデーモンを召喚するために魔道具を使用し、過剰な魔力で身体を蝕まれていた。  
俺が何もせずとも死んでいた。むしろ拘束するために俺がスピネルの魔力を抜いたことで、何もしないよりは少し長く生きられたのかもしれない。





かといつて、たとえ悪者であっても、死者が出ることは絶対に許されないと言い切れるほどの強い倫理観も、俺は持ち合わせていない。もちろん、死者が出ないに越したことはないが、あくまで理想論でしかないことも分かっている。

——結局、これでよかつたんじゃないかと思ってしまう俺は、やはり薄情なのだろうか。「安心しましたよ、ウィル君」

そんなことを考えていると、ジョーン先生が腕を組んで微笑んでいた。

「安心……?」

反射的に眩げば、さらに柔らかな笑顔を向けられる。

「ええ。もう『影』の脅威に怯える必要はありませんからね。あの『影』のことですから、死んだように見せて実は——なんて心配もしていません」

ジョーン先生の言葉がストーンと入ってきた。複雑に絡まって固まっていた感情が氷解する。

なるほど。

俺は『影』に怒るより何より、『影』を恐れていたのだ。

実際にスピネルが死ぬところを見たわけじゃないのが、さらに恐怖に拍車をかけていたのかもしれない。

それにしても、自分の命と引き換えに俺を亡き者にしようとしたスピネルの執念はもの

すごい。

魔力は初めから身体の中に存在しているものなので、個人差はあるものの、各自のキャパシティの範囲内なら外部から取り込んでも問題ない。けれど、許容量以上の魔力を一気に取り込むと身体の中で魔力が暴れだし、身体を蝕むのだ。もちろん、外部から魔力を取り込むなんて普通はできないし、そんな現象が確認されたのも歴史上数回しかないらしい。デーモンを召喚するほどの魔力量なんて一気に取り込んだら、それこそ一溜まりもないだろう。

そこまで考えて、なるほどと合点がいった。

影の館で戦ったときの、あのスピネルの疲れたような動きの悪さもそれが原因だったのだろう。よくもまあ動けたものだと思ってしまう。

いやしかし、身体が限界まで蝕まれた状態であれだったとか……ゾッとするぜ。

そこまで奴を駆り立てたものは何だったのだろうか。自殺行為のような手段で突っ込んでくるなんて、並大抵の覚悟じゃない。

何を思い、何のために、そんな行動に出たのだろうか。『影』は俺やその関係者に恨みを抱いていたのか？

いや、しかし、『影』の長スピネルのあの眼は、少なくとも強大な恨みや怨念を内在させた者のそれではなかった。

では、なぜ……?」

「……ル君、ウイル君」

「ふぁい!」

影の館での戦いに意識を飛ばしていたせいだ。再びジョーン先生に真剣な表情で話しかけられた瞬間、飛び上がってしまった。

「どうしたんですか」

呆れた目を向けられたが、俺の心臓はバクバクである。

しかしまあ、心の中に渦巻いていたものは一気に飛散してしまった。何だか、スピネルの目的とか心情とか想像して心臓が冷たくなったような気分だったからな。ちようどいいと言えは、ちようどよかった。

「イエ、ナンデモナイデス。……で、何でしょう?」

気を取り直して、先生に聞き返す。

「初代国王以降、新しい魔道具がほとんど作られていない理由は、魔法陣や詠唱自体の意味が解明されていないからです。この魔道具が『影』に代々伝わるものか、今回のデーモン召喚に際して開発されたものかは分かりませんが——」

そこで一息ついたジョーン先生は、さらに深刻そうな表情になる。

そして、重々しく言った。

「仮に新たに作られたものならば、その研究費用や実験の犠牲者の数は計り知れない。——とても一組織でできることはありません」

#### 4

ウイルがジョーンの研究室にいる頃。

サンは珍しく陰鬱そうな表情で机の前に座っていた。机に出された本たちは随分と長い間放置されている。

「……ためだ……」

ポツリと呟いてサンは立ち上がった。

そう、分からないのだ。飛び級の試験勉強のために図書館から借りてきたその本に、手をつけれない。

これは飛び級を目指すサンにとって死活問題だった。

——ウイルが姿を消しても、初めは問題なかった。しかし、早くも二日目の夜になると、もう分からない問題が出てきて、読み進めてもそれが蓄積されていくばかり。ついには本を開いても、まったく頭が働かない状態にまでなってしまった。

たった一週間に満たない間で、だ。  
サンにとつて、この事実は焦燥感を生み出すのに十分だった。  
知らず知らずのうちにウィルに随分と頼っていた——そのことにサンは気づいてしまったのだ。

今サンがウィルに勉強を教えてもらっているのは、土曜の勉強会だけである。  
だからウィルがいきなり消えて、部屋に『ちょっと出かけてきます』と書置きを残していったのには少々……いや、かなりムツとしたが、別に自分の勉強に影響が出ることはないと思っていた。普段からそんなに教えてもらっているわけではないし、自分ひとりで勉強できると、そう考えていた。

しかし違った。それがウィルの不在によって、奇しくも判明してしまったのだ。  
思えば平曰も、サンは問題を解きながらウィルと部屋で何かしら喋っていた。それは答えを聞くわけでもなく、勉強を教えてもらっているという自覚もサンにはなかったのだが、よくよく考えてみれば、ウィルはさりげなくサポートしてくれていた。

悔しくないと言ったら嘘になる。けれど、もうウィルは別次元の存在だということも分かっている。

だから、ウィルにサポートしてもらっていたこと自体を気にしても仕方がない。  
今のサンにとっての大きな悩みは、九月に待っている『飛び級試験』である。

何としてもサンはそれを受からなければいけないのに、それが自力ではできそうにない。  
思っていたより自分は勉強が得意ではなかったのだと、今さらながら知ってしまったのだ。  
だ。

「たいへんだ……」

サンは頭を抱えて呆然と呟いた。



魔道具の確認を終えてジョン先生と別れた俺は、そのままジルコさんの屋敷に転移することにした。

さつきはスピネルが死んだという衝撃の事実焦って転移してしまったからな。

街の人が俺の行動にいちいち注目しているとは考えづらいが、もしもということもある。さつき屋敷に入った人間が全然違う場所から出てきたと気づいたら、不自然に思うかもしれない。

俺としては、こんな便利な力に頼りきりになってしまうと、将来が怖いというのがあるのだが……。

だってそうだろう？ 歩く必要がないんだから、当然足腰の筋力は落ちる。若い頃の基

礎体力や身体作りは案外重要で、若い頃に運動をしていた人とそうでない人は年を取ってからの健康度がまったく違うという。定年を迎えても、その後の人生を楽しめない可能性もある。いや、それは言いすぎかもしれないが……つまりは、たかが運動不足と侮ることなかれ、なのである。というか、この世界には終身雇用制もなければ定年もないけど。

……って、んなことはどうでもいい！

……何の話してたんだったけ？ あーそうそう、転移だ。

運動不足の問題だけでなく、この力はあまり多くの人に知られたくない。

敵が知らなければ、攪乱や戦術を崩す切り札として使えるからだ。

緊急時や仲間の前以外で簡単に切り札を使うなど、馬鹿のすることである。

俺は馬鹿じゃないからな！ ……うん、馬鹿じゃ、ないよね？

なんかヒツツエ皇国で色々やらかした馬鹿だろ、とか聞こえたのは気のせいだろう。

それに、今回ジョーン先生のところに行くのに使ったのは気のせいだろう。

緊急事態だったし？ 八歳の子供が城に行って、王宮仕えの学者さんに取り次いでーとかお願いしたところで追い返されるのがオチだったろうし？ そりゃあ、国王陛下の耳に入れば通してもらえただろうけど、そうしたら大事になっちゃうし？

あ、まあ何も言わずにいきなりジルコさんの前から転移していったのは、ちよつと失礼だったかもしれないな！ てへっ！ ウイル、やつちゃった！

……ごめんなさい、俺が悪かった。  
冷静沈着。

今年の目標にこれを加えておこう。反省。

「すみませんでしたー！」

というわけで、ジルコさんの屋敷に転移するなり頭を下げる俺であった。



何とかごまかしながら、魔道具の機能について説明し終わると、案の定ジルコさんは呆然としたような表情の中にどこか安堵を滲ませていた。

「そうであったか……」

そう言って天井を仰いだジルコさんに頷くと、苦笑が返ってきた。

「しかし、いきなりウィル殿が消えたときは転移の術を存じ上げているといえども、心臓が止まるかと思ひ申した」

「……それは、本当に申し訳ありませんでした」

頭を下げればさらに深まる苦笑。

「——本当に非常識なお方だ」

ジルコさんが小さく呟いた言葉は、誠に残念ながら俺の地獄耳が捉えてしまっていた。  
 ……ほんと、その節は申し訳ないと思っております。冷静さを欠き無礼をはたらいたこと、このウイリアムス、心より理解しておりますので、どうか許してくださいませ！へえ！

……つて、ふざける場合じゃないんだよな。

反省はしているのだが、今は何よりも違う問題が差し迫っている。

そう——寮の門限である。

今から戻れば、ギリギリ間に合いそうなのだ。

「ところでジルコさん。誠に申し訳ありませんが……」

眉を下げて時計に視線を向けると、ジルコさんは察してくれたようだった。

「もうこんな刻に……いや、ウイル殿はそう言えばまだ八歳なのであったな……」

しみじみと呟いたジルコさんは、ゆっくりとした動作で立ち上がった。

さて、俺も……と、一段落ついて完全にオフモードになっていたからだろう。

立ち上がって一步踏み出した瞬間、足元の床板がクルリと回ったことに咄嗟に反応できなかった。気づいたときには、薄暗い場所に落っこちて——

「……ここ、どこ」

何とか着地の体勢を取って無事に降り立った俺は、周りを見回して溜め息を吐いた。

——こんなところで忍者屋敷のフラグ回収しなくてもいいんですけど!!

真上にジルコさんの焦った気配がなければ、そう思いっきり叫びたかった。



視界に映るのは漆黒。

無様に落っこちた俺を待ち受けていたのは、そんな空間であった。

「……ウイル殿——！ 無事であるか!?!」

上からジルコさんの必死な叫び声が聞こえてくるので、呆然とするのは止めて返事をする。

「はい！ 無事ですすよ！ 何やら暗いところに落っこちました」

まあビックリ仰天して重力にそのまま引っ張られちゃったわけだけど、俺には魔法というものがある。

「では、い——」

——まから転移しちやいます、と言おうとしたところで、上で何やら怪しげな軋むような音。

それを察知すると同時に、ほぼ反射的にその場から飛び退いた俺の耳に届いたのは、ジ

## 立ち読みサンプル はここまで